

昔むかし。

ひきがえるが、池の中にたまごをたくさん産みました。やがてたまごは、おたまじゃくしになりました。おたまじゃくしはみなしつぽがあつて、水の中をさかなのように泳ぎまわっていました。

ある日のことです。なまずが散歩に出かけました。なまずは、おたまじゃくしが泳いでいるのを見て、

「お、おれの子どもたちがいる」といいました。ひきがえるは、あわてて、

「これは私の子どもたちだよ」といいました。けれども、なまずは自分の子どもだといつてきません。とうとうなぐりあいのけんかになってしまいました。ひきがえるがいいました。

「おまえなんか、私に勝てるもんか。わたしが歯ぎしりしたら、天は四方八方ふるえあがるんだよ。わたしが舌打ちしたら、あつというまに三千匹のアリが死ぬんだよ。よおく考えな」

なまずはいいました。

「ふん。おれがしつぽをふつたら、大きな波が三つも押しよせてくるんだぞ。おれがひれをふつたら、たくさんのかにおだぶつになるんだぞ。おまえこそ気をつけな」

けんかはいつまでたつても終わりません。しまいに、ふたりは裁判官のところへ行つて決めてもらうことにしました。裁判官はいいました。

「その子たちがだれのものなのか、今のところまだ決められないなあ。三月になって、子どもたちがもうすこし大きくなつたら、また来なさい。そのときにあらためて調べて、判決をいいわたそう」

三月になると、裁判官は役人を池に行かせました。そして、子どもたちがどんなようすをしているか調べさせました。それから、なまずとひきがえるを呼びだしました。

役人が、いいました。

「おたまじゃくしにはもうしつぽがありません。もう水の中には暮らしていなくて、岸辺をうれしそうにとびまわっております。これはまちがいなくひきがえるの子どもでございませぬ」



裁判官は、テーブルをドンとたたいていいました。

「これ、なまず。おまえは、わしをだましたな。そればかりでなく、他人の子どもを自分の子どもだといって奪^{うば}おうとしたな。おまえは死刑^{しけい}だ」

なまずはおどろいていいました。

「あなたをだますなんて。子どもたちは、あるとき、さかなみたいにしつぽがあつたんです。それで、まちがえてしまったんです。ひきがえるから子どもを奪^{うば}おうなんて考えてもいませんでした。どうかおゆるしてください」

裁判官はいいました。

「おまえの罪^{つみ}は大きいぞ。だが、正直に話したので死刑はゆるしてやろう。そのかわり、二度とこんなことをしないように、おまえの頭をむちでたたくことにしよう」といいました。

なまずは、頭をむちでたたかれました。そのときから、なまずの頭は平たくなつたという事です。

原話…『世界の民話22インドネシア他』小澤俊夫編訳／ぎょうせい刊

再話…村上郁